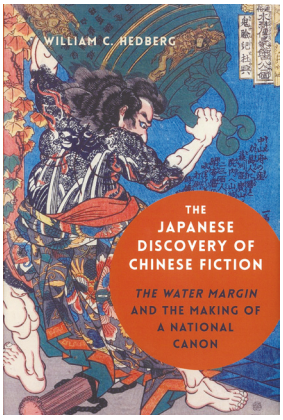
書評

ウィリアム・C・ヘドバーグ『日本における中国小説の発見――『水滸伝』と国民的カノン形成』

William C. Hedberg, *The Japanese Discovery of Chinese Fiction:* The Water Margin *and the Making of a National Canon*

山本嘉孝



Columbia University Press, 2019

The Japanese Discovery of Chinese Fiction（日本における中国小説の発見）は、幾重にも橋渡しを行う研究書である。著者の William C. Hedberg 氏は、十七世紀後半から二十世紀初頭まで、すなわち江戸・明治・大正期の日本で、「中国」という場所や「小説」という語・概念の意味が、いかに大きく変化し続けたのかを解き明かしながら、国・言語・時代・専門領域の壁を乗り越え、中国の小説である『水滸伝』が日本でいかにして受容されたか、その軌跡を丹念にたどっている。

著者自身も指摘するように、近世から昭和までの日本における『水滸伝』受容については、高島俊夫氏の日本語による研究書がある。[1] しかし、Hedberg 氏は、時代区分の性質、「受容」という概念そのものの意味、近代的国民国家の形成過程などの諸問題について、理論的見地から深い洞察を加えるのと同時に、江戸時代中期の儒者、清田儋叟の旧蔵書で、儋叟による自筆書き入れのある『水滸伝』（東京大学東洋文化研究所蔵）や、大正七年（一九一八）に刊行された徳富蘇峰の中国旅行記『支那漫遊記』など、高島氏が検討していない資料をも調査・分析しており、新たな境地を切り拓くことに成功している。

本書は、序章、本論の四章、終章から成る。本論のうち、前半二章は近世すなわち江戸時代を取り上げ、後半二章は近代のうち明治・大正時代を中心に取り上げており、時系列に沿って論が進められてゆく。第一章は近世中期（十八世紀）の唐話学、第三章は明治期（十九世紀後半）の「文学史」研究に光を当てている。唐話学や「文学史」研究というのは、それぞれの時期の日本で新

たに創出された学問分野であり、それぞれの時代において、『水滸伝』受容の背景と文脈とを提供した。また、第二章と第四章は、さまざまな属性の読者ないし消費者たちに焦点を絞り、江戸〜大正期の知識人たち、あるいは小説や錦絵を楽しんだ人々が、『水滸伝』とどのような関係を取り結んできたかを具体例にもとづいて考察する内容である。本書の特徴の一つは、抽象論に安住せず、常に歴史的な事象に注意を払う点に見出せる。

本書では、本論各章の題目に、「近世」、「明治」、「大正」などの語が用いられているが、著者は、時代区分を不変の概念としては捉えておらず、むしろその再考を促している。Hedberg 氏の見解によれば、十九世紀日本における文学的な転換点は、明治維新（一八六八年）ではなく、それよりも後の明治二十年代〜三十年代前半（およそ一八八〇年代後半〜一八九〇年代）に訪れた、とされる。その時期に「文学史」研究という新たな学術分野が創出され、テキストやジャンルを比較するための新しい枠組みが確立された時期であったと考えられるためである（十三頁）。如上の考察は、歴史上の実際の転換点というものが、従来の概念的な時代区分とは必ずしも一致しない、ということをあらためて示している。

では、転換期とされる一八八〇年代後半〜一八九〇年代に、日本における『水滸伝』の位置はどのように変化したのか。この問いに対する Hedberg 氏の回答を要約するのは容易なことではない。同氏は、込み入った問題を単純化せず、複雑さを複雑さとして取り扱うためである。しかし、一言でまとめるならば、「中国」という場所に対する認識の変化と「小説」というジャンルの地位向上、という二つの要因が作用していた、という論が展開されている。明治・大正の日本の知識人たちは、「中国・日本・西洋の文字文化」（一〇一頁）をいわば三角測量することで、『水滸伝』のことを「非歴史的な、時代を越えて変わることのない中国らしさ」（一六一頁）の体現として見なすようになった、という。一八八〇年代後半から一八九〇年代にかけての日本で、『水滸伝』をはじめとする「小説」の名作こそが、古代から現代まで不変とされる国家の本質を象徴するようになったのである。Hedberg 氏による優れた発見は、一国の文学とは何か、という問題について十九世紀後半の日本の知識人たちが考える際に、中国の白話小説である『水滸伝』をめぐる言説が重要な役割を果たした、という点である。

本書では、考察の対象が広範囲であるにもかかわらず、細部に至るまで精緻な論が展開されている。それでも敢えて穿鑿するならば、若干の疑問が残る箇所もある。終章では、「近世日本における『水滸伝』受容について、百科事典的で完全な記述を行うこと」（一八〇頁）はほぼ不可能である、という趣旨の記述がある。全てを網羅することは不可能であるとしても、本書で詳細に考察

されなかった範囲があるとすれば、それは奈辺にあるのか、またその範囲の選択はいかなる理由にもとづくものであったのか、簡単にでも示されてもよかったのではないだろうか。

加えて、徳富蘇峰『支那漫遊記』の特定の箇所に関する著者の解釈について、二点ばかり疑問がある。蘇峰が中国を「文明中毒国」として評した際の「文明」について、Hedberg 氏は、「伝統的な儒教文化の息苦しさ」（一七三頁）を指すものとして解釈している。しかし、蘇峰が古代中国の代表的な人物たちとして挙げるのは、戦国時代に儒家ではなく縦横家として活動した蘇秦と張儀である。[2] 果たして蘇峰は、縦横家と儒家を混同し、蘇秦と張儀を儒者として見なしたか、あるいは見誤ったのだろうか。これが一つ目の疑問である。二つ目の疑問は、蘇峰が反中感情をあらわにする、もう一つの箇所に関してである。蘇峰が中国のことを「謎題」と呼んだことについて、Hedberg 氏の解釈によれば、いわゆる「謎めいた東洋」（“Oriental inscrutability,” 一七一頁）を中国に見出したというより、蘇峰が同胞すなわち日本人たちの中国に対する無関心を指摘しようとしたことと関係があったのだという。しかし、「四千年の歴史」と題されたその次の章を読むと、蘇峰は再び「支那人」のことを「不可解の謎題」と呼び、「如何にも肌触り善く」とか、「海千山千」などといった言い回しを用いながら、表向きの友好の裏側に隠れた狡猾さがある、というようなことを述べている。[3] 読むのも不快な内容ではあるが、蘇峰の毒筆は、中国の人々に対して向けられており、やはり蘇峰は、中国人を inscrutable（謎めいた、不可解な）な存在として見なそうとしていたのではないだろうか。

とまれ、全体として本著は、具体的な歴史上の事例の検討にもとづき、文化的な産物や、文化的事象に関わる用語が、常に変化し続けるものであり、また多様な形を持つものであることを明確に示すことに成功している。実のところ、『水滸伝』は単一のテキストとして存在したことはなかった。さまざまな版、改編、注釈、再利用、図像等といった、しごく多種多様な形を取りながら、これまで存在し、受け継がれてきたからである。また、「中国」、「日本」、「小説」などという語も、いつ、どこで、どのように用いられたかによって、意味が大きく異なるのである。Hedberg 氏による研究は、歴史的視座を大切にしながら、複数の国・地域を同時に取り上げた文学研究として傑出しており、比較文学、あるいは一国の文学の研究、はたまた文学研究に限らず、あらゆる分野の人文学研究の模範とされるべきものである。

注

（1）高島俊夫『水滸伝と日本人――江戸から昭和まで』（大修館書店、一九九一年）。

（2）　徳富蘇峰『支那漫遊記』（民友社、一九一八年）、三九三頁。

（3）　徳富蘇峰、同上、四二五頁。

＊本稿は*Japan Review* 37（2022）に掲載された英文テキストの日本語訳である。